

知的障害児と探究する動くおもちゃものづくりとあそび

ークラス・家族の中での *United by Emotion* と *Unity in Diversity*ー

○松永泰弘（静岡大学教育学部，元附属特別支援学校校長）
KEY WORDS: 動くおもちゃものづくり, *United by Emotion*, *Unity in Diversity*

1. 研究の目的

特別支援学校学習指導要領解説各教科等編(小学部・中学部)¹⁾において、小学部段階の遊びの指導は、「遊びを学習活動の中心に据えて取り組み、身体活動を活発にし、仲間とのかかわりを促し、意欲的な活動を育み、心身の発達を促していくもの」であり、特に低学年では、幼児教育における学習との関連性や発展性を考慮する上でも効果的な指導となり、義務教育段階の円滑なスタートのために計画的に位置付ける工夫の必要性が書かれている。また、遊びの指導の成果を各教科別の指導につなげるようにすること、諸活動に向き合う意欲、学習面、生活面の基盤となるよう、計画的な指導を行うこと、児童の意欲的な活動を育めるようにすること、児童が主体的に遊ぼうとする環境を設定することが大切であるとされている。

各教科の指導について、知的障害のある児童の実態は多様であり、学びの連続性を確保するため、小学校の各教科等との内容構成を参考に充実し、関連を分かりやすく目標及び内容の系統性を整理しなければならないとされている。生活科の内容には、理科とのつながりを踏まえ「身の回りにあるものの仕組みや働きに気付き、それを教師と一緒にみんなに伝えようとする」「ものの仕組みや働きについて関心をもつこと」と整理され、具体的に、ものづくり、エネルギー、力、重さ、動くおもちゃが挙げられている。

一方、特別支援学校において理科教育を意識して取り組んでいる学校は多くないのが現状であり²⁾、あそびやものづくり、動くおもちゃと関連した取り組みは数少ない。例えば、小学校支援学級 5、6 年を対象としたあそびものづくり「ピタゴラ装置をつくろう！」³⁾などの実践例がある。

そこで、本研究では、動くおもちゃものづくり・あそび・探究の活動を取り上げ、知的障害の特別支援学校小学部低学年を対象に、これまでの幼児教育と今後の理科とのつながり、諸活動に向き合う意欲、学習面、生活面で意欲的な活動を育み、主体的に遊ぼうとする環境などについて、活動の有効性を検証する。使用する教材は、車輪で斜面を移動し斜面の段差で体が転がる動くおもちゃものづくり教材^{4), 5)}である。見本のおもちゃの色使いや段差で転がる動きに対する不思議さや驚き、興味を引き起こし、「つくりたい!」「あそびたい!」という感情でつながる (*United by Emotion*)。自己の思いや考えで、色を塗る、貼る、組み立てる製作の活動とあそび・探究する活動の中に、新しい思いや考えを生み出す喜びや味わいを感じながらよりよいものにする姿の出現する (*Unity in Diversity*)⁶⁾。こどもたちが互いに影響されながらがんばる姿と豊かな活動の出現について、活動の様子と保護者アンケートを分析することにより明らかにする。

2. 車輪と斜面の段差で転がる段ボール製のゾウ

先行研究で開発した車輪で斜面を移動し斜面の段差で体が転がる動くおもちゃものづくり教材^{4), 5)}を取り上げた。ものづくり、あそび、エネルギー、力、重さ、動くおもちゃなどの理科の内容だけでなく、言語活動としての国語、距離や高さなどの算数の内容を含む教材である。



図 1 車輪と斜面の段差で転がる段ボール製のゾウの見本模型（草むらに隠れているゾウ、虹を見つめているゾウ、桜の花びらがくっついたゾウ、夜空の星を見つめるゾウ）

3. 事例児童の表れとアンケートによる分析

引率教員は、この実践のまとめで「自分で組み立てたおもちゃが坂道を転がる様子に子供たちは興味津々！充実した学びの機会となりました⁷⁾」（HP 参照）と評価した。

次に、事例児 A-1M の行動、発話、保護者アンケートの内容分析から、児童の変容を明らかにする。

普段の様子：発話は少ないが、ジェスチャーやわかりやすい単語などの情報をもとに、話の内容を理解できる。

実践中の様子：夜空の星のゾウをみて「キラキラ」と表現。母親が塗る場所を指示して色は自分で決めて塗っていた。色を塗り終わったあとに先生や母親に「見てみて～」と見せていた。木槌を使うのが難しそうで、うまくはまらなかった。

あそびの様子：後ろ向きで転がしてみる姿が見られた。転がる様子を見て、ガッツポーズ・拍手をしていた。何度も何度も遊んでいる姿が見られた。

アンケート自由記述：塗ったり貼ったり、木槌でトントンしたり、自ら取り組んでいた。自宅でも、兄が帰ってから、一緒に坂になりそうな台を探して、一緒に何度もあそんでいました。父が帰ってからも、同じように皆で遊んでいました。自宅の、皆の目が届きやすい所に両手でしっかりと置いていた。言葉はあまり話しませんが、ニコニコ笑顔で拍手をパチパチして何度も遊んでいました。父と兄が「すごい！回転する!!」と、どうして回転するのか興味津々に話し合っていました。普段、YouTube やゲームをしている兄も、仕事帰りの父も一緒に遊んで楽しかったです!!家族が笑顔で過ごせました。

考察：普段、発話の少ない児童が言葉で表現しようとする意欲的な姿が実践中に出現した。また、後向きにするなど新しい遊びを考え、何度も遊ぶ様子、ガッツポーズや拍手が見られ、主体的な活動であったといえる。実践に参加した母親も、楽しそうに誇らしげ、満足そう、大切にしていたと強く感じた。発達や年齢の異なる兄や父と一緒に遊んで驚き、興味津々に話し合う学びの集団が出現した。*United by Emotion* と *Unity in Diversity* の成立と分析できる。

本研究は JSPS 科研費 JP21K02924 の助成による。

(MATSUNAGA Yasuhiro)